



南部鉄瓶雑学

堀江 皓 岩手大学工学部教授
日本鑄造工学会会長

南部鉄瓶は茶の湯釜や花瓶、灰皿、風鈴などと同様に「南部鉄器」の名で全国に知られ、岩手県の代表的な特産品の一つであり、盛岡市と奥州市(旧水沢市)がその産地を形成している。花瓶、灰皿、風鈴等の工芸鉄器が量産可能な生型鑄造法で生産されているのに対し、鉄瓶は茶の湯釜と同じように古来から伝わる真土(まね)型鑄造法で、手づくりで造られている。

鉄瓶の生まれる背景をみると、金山の探鉱に関係があるので興味深い。すなわち、聖武天皇の頃の天平20年(749年)、奈良東大寺大仏鑄造の時、東北地方を治めていた陸奥守が砂金900両を献上したことに端を発し、京都から入り込んだ人達によって北上川流域の開発が始まり、いわゆるゴールドラッシュが出現した。このような金山開発に伴い、多くの鉄鉱資源も見い出されて、原始的な方法で鑄造が行われた。奈良時代に中国流の精錬法が日本に導入されてからは、「金屋」が鉄の精錬法を全国に広げた。さらに技術の進歩に伴ってこの「金屋」は「野鍛冶」、「延鉄師」、「鑄物師」に分業され、それぞれの土地に定着するようになった。奥州市の鑄物産地である羽田地区がこれに当たる。

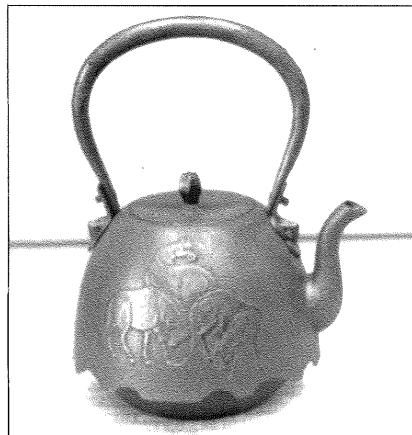
このように原料に恵まれた下地があったので、寛永10年(1633年)に南部藩主南部重直が居城を三戸から盛岡に移して以後、甲州や京都から鈴木縫殿(ぬい)、有坂茂右工門を御鑄物師、小泉仁左工門、藤田善助を御釜師として召し抱え、これらの工人達がもう一方の産地である盛岡を支えたのである。

そして、8代藩主南部利雄の頃、3代小泉仁左工門が茶の湯釜の寸法を縮め、注ぎ口と鉉(つる)を調和よくつけたものを製作し、さらに次々と改良が加えられて現在の鉄瓶が誕生したと言われている。当時は茶の湯釜に注ぎ口と鉉を付けたものを「鉄薬罐(てつやかん)」と称したが、その後「薬罐釜」といい、さらに「手取り釜」と称し、ついに「鉄瓶」と名付けられるようになった。

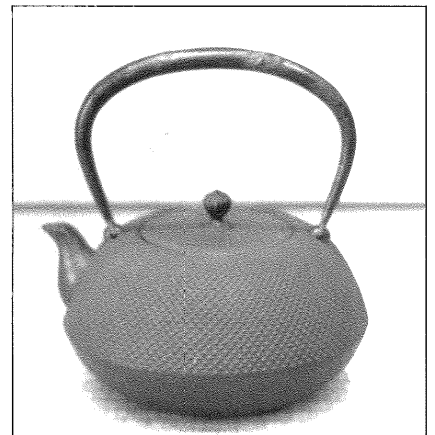
さて、鉉に対して対称となっている鉄瓶にも裏表があることを知っている人は案外少ないのではないだろうか。次頁に示した形の違う鉄瓶の正しい置き方は(a)、(b)どちらであろうか。答えは(a)である。すなわち、正面から見て鉄瓶の次ぎ口が右を向く(a)の置き方が正しい置き方である。これは茶の

湯のお点前(てまえ)からきており、客人の前で右手で鉄瓶の鉦を握ってお湯を注ぐ場合、客人から鑑賞される面が表であることに由来している。

また、鉄瓶にはお湯の温度が上がったときに蓋の鳴る鉄瓶と鳴らない鉄瓶がある。(a)の鉄瓶は「南部型」と呼ばれ、(b)の鉄瓶に比べて胴が長くなっており、このような形の鉄瓶が蓋の鳴る鉄瓶である。これは、(a)の形の鉄瓶は注ぎ口の付け根の位置が低いので、お湯の温度が上がると鉄瓶の胴内空間の蒸気圧が上がり、この圧力が蓋を押し上げ、圧力が解放された後、蓋が下がって本体と接触する時に趣のある美しい音を発生する。一方、(b)の形の鉄瓶は、胴が短く、注ぎ口の付け根の位置が高いので、注ぎ口から直接蒸気が放出されて、蓋が持ち上がらないので音が出ないのである。



(a)



(b)

さて、南部鉄瓶を裏返して見ると、注ぎ口の下の辺りに作者の「銘」を見ることができる。このような「銘」が鑄刻されるようになったのは明治の中期頃からで、内外の博覧会に出品するためと、自己の作品に対して責任を持つことによるものである。ちなみに、南部藩時代からの鑄物師である鈴木家は代々「盛久(もりひさ)」を、有坂家は「吉興(よしおき)」を、小泉家は「仁左工門」を「号」として名乗ってきた。岩手県内の南部鉄器製造工場や工房もそれぞれ「号」を持っており、これらの「号」が鉄瓶や鉄器に「銘」として鑄刻されているので、我々は作者を知ることができる。

「鉄葉罐」から「鉄瓶」まで約100年の歳月が経過して、鉄瓶は茶の湯釜の代わりに手軽に用いられるようになり、一般の需要も増え、茶事だけではなく湯沸かしの日用品となり、今日まで普及してきたのである。